

釜石の歴史

よもやま話

7

歴史のさんぽみち編

(3)

問い合わせ
市文化振興課 ☎27-5714

釜石に眠る遺跡

縄文の道具編①

前回に引き続き、釜石市内の縄文時代の遺跡から出土する道具について紹介します。今回はさかなのまち釜石が縄文時代から始まったことを示す漁労の道具について紹介します。

シカの角で作った釣り針

唐丹町大石地区に所在する屋形遺跡で見つかった貝塚からは、角や骨、貝などで作られた貴重な遺物が出土します。この中にはニホンジカの角で作られた釣り針が含まれていました。



角で作られた釣り針
【原寸大】

約3千5百年前の貝塚から出土したこの釣り針は、長さは約3cmと小さく、横幅はわずか1.4cmしかありません。しかし、魚が逃げられないようカエシが精巧に作られています。また、チモトと呼ばれる糸を結ぶ箇所はまるで鳥の嘴のような形をしています。この鳥の嘴を模した形は、仙台湾から岩手県南を中心とした地域で見られることができます。

さて、釣り針の軸の中央部が黒くなっています。これは紐を巻き付けた

痕跡なのですが、なぜここだけ色が黒いのでしょうか？これは接着剤として使用された天然のアスファルトが原因のようです。釜石周辺では天然アスファルトは産出しないため、おそらく日本海側との交流で手に入れたと考えられます。

シカの角で作った鉋(ヤス)

遺跡は不明ですが、唐丹町で表面採集された鉋もシカの角で作られています。こちらも近世までの突きん棒漁で使用された鉋とそっくりです。大型の魚や海獣類を捕獲する際に使用されたと考えられます。また、先述した屋形遺跡で表面採集された土器の底には鉋が刺さった魚が描かれていました。

これらの資料は、縄文時代にすでに漁具が完成しており、釜石が古くから漁業で栄えていた事を示しています。



角で作られた鉋



土器に描かれた魚を突く様子

釜石の化石 (天然記念物)

釜石の地質年代は多岐にわたりますが、今回は古生代と呼ばれる地質年代の化石についてみていきたいと思います。

植物化石の一つであるリンボクは、日本最古級の植物化石で、両石町から栗林町に所在する千丈ヶ滝層に見ることができます。千丈ヶ滝層は古生代の主にデボン紀の地層で、今から約3億5800万年から4億1900万年前の地層です。岩手県立博物館と現地調査を行ったところ、リンボクの化石は発見できなかったものの、同じ地層から植物の化石を見つけることができました。釜石鉾山の鉄鉾石が生成された時期が中生代の白亜紀にあたる約6600万年前から1億4500万年前のことですので、途方もない昔の植物の化石を釜石で見つけることができるのは驚きです。なお、千丈ヶ滝層は、三陸ジオパークのジオサイトに指定されています。

リンボクの化石の見つかる千丈ヶ滝層周辺では、同じ古生代の石炭紀(約2億9800万年から3億5800万年前)の小川層や、ペルム紀(2億5100万年前から2億9800万年前)の栗林層が所在しています。栗林層は礫岩と呼ばれる礫が集まってできた岩石を伴っており、ウミユリや腕足動物の化石を見る

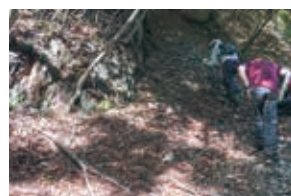
ことができます。また、小川層の石灰岩からはサンゴやウミユリの化石を見ることができます。栗林から両石の山中は、古生代のデボン紀、石炭紀、ペルム紀の化石や地層を狭い地域で観察できる大変貴重な場所といえるでしょう。



リンボクの化石 (千丈ヶ滝層) 県立博物館



植物の化石 (千丈ヶ滝層)



千丈ヶ滝層の露頭



ウミユリの化石 (栗林層)



サンゴの化石 (小川層)



小川層付近の滝

